



鶴見大学図書館
第161回
貴重書展

鶴見大学図書館の蒐書を巡る

古典籍の 文献学

総持学園創立
一〇〇周年記念
物語と歌書

2024年
10月10日(木)~
11月30日(土)

※休館日については
図書館HP参照願います

於
鶴見大学図書館
1階エントランス
[入場無料]



Official
WEBSITE



Official
X

関連書籍
・
書物学
第25巻
古典籍の文献学

定価2,200円
勉誠社

ACCESS
JR 鶴見駅・徒歩5分
京急 鶴見駅・徒歩7分



【展示期間】2024 年 10 月 10 日（木）～11 月 30 日（土）

【開館時間】

月曜～金曜：8 時 50 分～21 時、土曜：8 時 50 分～18 時、日曜・祝日・大学休業日：休館

※10 月 14 日（月/スポーツの日）、11 月 4 日（月/文化の日振替休日）は授業実施日のため開館：8 時 50 分～21 時

※10 月 27 日（日）は学園祭開催のため開館：10 時～15 時

【休館日】

10 月 13 日（日）、20 日（日）、

11 月 3 日（日）、10 日（日）、17 日（日）、21 日（木）、23 日（土/勤労感謝の日）、24 日（日）

【関連行事】

①講座「『風雅和歌集』の竟宴」

日時：10 月 12 日（土）14 時 30 分～15 時 30 分（終了時間は予定）

講師：石澤一志氏（本学非常勤講師）

場所：図書館 2 階ラーニングコモンズ 1

参加方法：直接会場へお越しください（申し込み不要・参加費無料）

内容：鶴見大学図書館蔵 尊円親王筆『風雅和歌集』真名序と、摸刻本『風雅和歌集』真名序・仮名序を題材に、『風雅和歌集』の竟宴と、それが行われるまでの過程について（予定）

※竟宴（きやうえん）…平安時代、宮中で進講や勅撰集の撰進が終わったあとで催される酒宴。諸臣に詩歌を詠ませたり禄を賜ったりした。（デジタル大辞泉, JapanKnowledge より）

②展示担当教員による展示解説・ギャラリートーク

日程：10 月 24 日（木）、11 月 14 日（木）、11 月 28 日（木）

時間：各回とも 18 時～19 時（終了時間は予定）

場所：図書館 1 階エントランス

参加方法：直接会場へお越しください（申し込み不要・参加費無料）

各回とも内容は同じ（予定）です

【お問い合わせ】鶴見大学図書館

横浜市鶴見区鶴見 2-1-3 045-580-8274

book@tsurumi-u.ac.jp



第 161 回 鶴見大学図書館貴重書展

古典籍の文献学 ―鶴見大学図書館の蒐書を巡る―

第二部 歌書と物語

総持学園の創立百周年を記念して、本年 3 月に鶴見大学図書館の貴重書善本を紹介する『書物学 古典籍の文献学―鶴見大学の蒐書を巡る』（勉誠出版）を刊行し、4 月に記念展示第一部として「瑩山禅師 700 回大遠忌記念「仏書・禅籍貴重書展」」を開催しました。第二部では近年重点的に蒐集している『新古今和歌集』を中心とした歌書と『伊勢物語』『平家物語』等物語の善本を展示いたします。

目次

I 歌書―勅撰集・万葉集・和漢朗詠集―・・・2	* 金沢文庫切 * 伝尊円親王筆
01 『新古今和歌集』（断簡）〔鎌倉中期〕写 * 伝源実朝筆	16 『和漢朗詠集』（鎌倉中期）写 卷子装 2 軸 * 伝後京極良経筆
02-1~4 『新古今和歌集』（断簡）〔鎌倉中期〕写 * 伝後京極良経筆 * 桂切 ※他 3 葉	II 物語―伊勢物語・平家物語―・・・11
03 『新古今和歌集』（断簡）〔鎌倉後期〕写 * 伝後醍醐天皇筆	17 『伊勢物語』（室町後～末期）写 綴葉装 1 帖 * 伝小堀遠州筆（藤原定家筆本の模写）
04 『新古今和歌集』（脱落あり）〔鎌倉後期〕写	18 『伊勢物語』（室町後～末期）写 綴葉装 1 帖 * 伝安楽庵策伝筆
05 『新古今和歌集』（江戸初期）写 綴葉装 1 帖 * 伝小堀正之筆	19 『伊勢物語』（室町中期）写 綴葉装 1 帖 * 伝中院通秀筆
06 『新古今和歌集』（江戸前期）写 袋綴 2 冊	20 『伊勢物語』寛永 6 年（1629）刊 * 後印 袋綴 2 冊
07 『新古今和歌集』（室町後期）写 綴葉装 2 帖	21 『源氏物語』抜書 紅葉賀・花宴 〔室町後期〕写 * 伝青蓮院尊応筆
08 『新古今和歌集』（室町中期）写 綴葉装 2 帖 * 伝真乗院僧正（宗一）・伝定法寺公助僧正筆	22 異本『平家物語』（断簡）〔鎌倉末期〕写 * 伝世尊寺行俊筆 * 長門切
09 『新古今和歌集』（室町前期）写 綴葉装 2 帖 * 伝蛭川親元筆	23 異本『平家物語』（断簡）〔鎌倉末期〕写 * 伝世尊寺行俊筆 * 長門切
10 『新古今和歌集』（室町中期）写 綴葉装 2 帖 * 伝岩山民部澄秀筆	III その他―注釈・校訂・文法書―・・・14
11 『新古今和歌集』（江戸初期）写 綴葉装 2 帖 * 伝富小路氏直筆	24 『〔古今和歌集注〕』（室町中期）写 卷子装 1 軸 * 伝転法輪公敦筆
12 『新古今和歌集』（断簡）〔鎌倉時代初期〕写 * 伝寂蓮筆 * 古筆手鑑所収	25 『後訂萬葉集考異』中村春野編 袋綴 2 冊 文化 10 年（1813 年）
13 『風雅和歌集』真名序・春上（断簡） 〔南北朝時代〕写 * 尊円親王筆	26 Elements of Japanese Grammar, for the Use of Beginners, by Rutherford Alcock. (1861) 刊
14 『風雅和歌集』真名序・仮名序（模刻） 〔江戸前期〕印 * 尊円親王筆本模刻	凡例・・・16
15 『金沢文庫本万葉集』（断簡）〔鎌倉後期〕写	

I 歌書—勅撰集・万葉集・和漢朗詠集—

01『新古今和歌集』(断簡) 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 綴葉装 1 帖 (巻上存)〔鎌倉中期〕写

* 伝源実朝筆

登録番号、1410820。表紙なし。縦 23.0cm×横 15.5cm。内題、「新古今和歌集序 (～巻第九)」(巻十は内題の部分が欠)。見返し、前は欠、後は布目地金紙に銀泥で山を描き、銀切箔や野毛を散らす。料紙、斐紙。11 括 (各枚数は 8 (最後の 1 丁欠)、8、8、9、7、9 (最後の 1 丁欠)、7、9 (最初の 1 丁欠)、7、9 (最後の 1 丁欠)、9 (最初の 2 丁欠))。落丁により、1 詞書～11 作者、299 詞書～305 上句、535 詞書～545 詞書、829 詞書～835 歌、895 歌～984 作者、欠。真名序、仮名序、本文の順に書写。毎半葉、真名序と仮名序は 7 行、本文は 11 行。和歌 2 行 (上句末で改行。詞書は 2 字下げ)。字高、真名序と仮名序は約 16.3cm、本文は約 16.5cm。奥書なし。蔵書印なし。朱で作者の勘物・撰者名注記・隠岐本所載歌への合点を記す (本文別筆か)。二重箱入り。内箱は桐で、蓋に「鎌倉右大臣實朝真跡／新古今集／西邨 (印)」と墨書。外箱は茶色漆箱。

当該資料は巻上のみの残欠本で欠脱も少なくないが、書写年代がかなり古いうえに、切出歌を持たず、撰者名注記と隠岐本所載歌への合点 (所載歌へ合点をつける方が、除棄歌へ合点をつけるよりも古い形式と見られる) を持つ点で貴重である。また、当該資料には春下 147～151 番歌の記された丁に、以下の紙片が挟み込まれている。

〈被出之〉

躬恒

〈衛〉なみのうへにほのにみえつゝゆく舟はうら吹風のしるべなりけり

作者名と歌には切出を示す「ゝ」が付けられている。挟み込まれた位置は伝来の過程で誤られたようで、実際は羈旅の切出歌 (1989 番歌) にあたる。朱の書入れと同筆と見られる。注意すべきは「衛」(通具) の撰者名注記で、後藤重郎『新古今和歌集研究』(風間書房、2004 年) の「撰者名注記一覧表」によると、当該歌の撰者名はこれまで知られていなかった。

掲出したのは、秋下の 456～462 番歌。右から 3 首目「人丸／あきしあればかりのつばさにしもふりて／さむきよなよなしぐれさへふる」の初句から二句にかけて「(あき) さればかりのはかぜに 院御本 (朱)」という傍記がある。「院御本」なる本と校合している点も該本の特徴で、傍記は『新編国歌大観』の本文に一致する。また、左から 2 首目「くさばには」の歌には「衛・定・隆・雅」の撰者名注記が付されるが、『新編国歌大観』所収の寿本は撰者名注記を欠き、大きく異なる。(田口暢之)

02-1『新古今和歌集』(断簡) 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 卷子装 1 軸 (巻 19 存)〔鎌倉中期〕写

* 伝後京極良経筆 * 桂切

1941 年、『新古今集』巻 16 が分割され、古筆了信により後京極良経 (1169～1206) 筆と極められた。実際には鎌倉中期写か (『古筆学大成 10』参照)。一方、宮内庁書陵部には巻 18 雑下 (函架番号 503・230) が、本学にも巻 19 神祇が切断されていない状態で所蔵されている。いずれも現在は卷子装であるが、もともとは綴葉装であったと見られる。料紙は斐紙。和歌を 2 行 (上句末で改行)、詞書を約 2 字下げで書写し、朱で異文を傍記する。字高、約 21.0cm。撰者名注記・隠岐本符号なし。特異な本文が散見するため、書写年代の古さとともに注意される。

登録番号、1370854。縦 24.5cm×横 474cm。もとは綴葉装 (幅、約 15.0cm)。15 丁と半葉が継がれる。後補浮線綾散らし裂表紙。見返し、金霞引き。外題なし。内題、「新古今和歌集巻第十九／神祇哥」。所収歌は国立歴史民俗博物館蔵伝藤原為相筆本と同様で、『新編国歌大観』1994 番の切出歌を本文中に含む (切出を示す記号はない)。朱で異文を注記する。朝倉茂入 (道順) による極札、「九条殿撰政良経公 (後京極殿御事／新古今和歌集巻第十九) (印)」(縦 17.9cm×横 1.7cm。本文冒頭の余白に糊付け)。

掲出したのは 1856 番歌。「いかばかりとしはへぬともすみよしの／まつぞふたびおひかはりぬる」。左注によると、ある人が住吉社に詣で「人ならばとはましものをすみの江の松はいくたびおひかはらん」(人であつたら尋ねたかった。住の江の松は何度生え変わっているのだろう) と詠んだ歌への返歌。「いかばかり年は」(どれほど年は) に続く本文が、本行では「経ぬとも」(経ったとしても)、左の傍記では「(経) ね (ども)」(経っていないけれども)、右の傍記では「(経ぬ) らん」(経っているのだろう) と、3 通り示される。『新編国歌大観』などは「経ねども」に作る。(田口暢之)

02-2『新古今和歌集』（断簡） 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 軸装 1 軸 〔鎌倉中期〕 写

* 伝後京極良経筆 * 桂切

登録番号、1339529。縦 23.9cm×横 14.2cm。巻 16 の 1487 詞書後半～1489 詞書前半。9 行。『新編国歌大観』では、2 首目の詞書が「返し」、第 3 句「みよなれど」が「みよなれば」となっている。古筆了信による極札、表「後京極殿良経公〈たちいつる〉（琴／山）」、裏「桂切 丙戌二（了信）」。『古筆学大成 10』未収。同書の図版 102 に接続する新出の切。（田口暢之）

02-3『新古今和歌集』（断簡） 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 台紙貼 1 葉 〔鎌倉中期〕 写

* 伝後京極良経筆 * 桂切

登録番号、1434857。縦 24.5cm×横 15.2cm。『新古今集』1474 詞書～1476 上句。9 行。古筆了信による極札、表「後京極殿良経公 白浪の（琴／山）」、裏「名葉桂切 新古今集第十六雑之部哥 一表／辛巳四（了信）」（裏は銀揉箔散らし）。『古筆学大成 10』図版 99 に相当。（田口暢之）

02-4『新古今和歌集』（断簡） 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 台紙貼 1 葉 〔鎌倉中期〕 写

* 伝後京極良経筆 * 桂切

登録番号、1437511。縦 24.4cm×横 15.3cm。巻 16 の 1471 番歌下句～1473 番歌下句。9 行。古筆了信による極札、表「後京極殿良経公 わか身を／さても（琴／山）」、裏「名葉桂切〈新古今集第十六雑之部哥 一表／西行々々〔＝法師〕之哥／世の中を之下句より〉辛巳四（了信）」。『古筆学大成 10』図版 98 に相当。（田口暢之）

03『新古今和歌集』（断簡） 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 卷子 1 軸（巻 8 存。巻頭欠）

〔鎌倉後期〕 写 * 伝後醍醐天皇筆

登録番号、1221073。焦茶色蔓文様緞子表紙。縦 23.6cm×横 23.3cm。見返し、薄い楮紙（銀切箔散らしの痕跡あり）。13 紙を継ぐ。元は幅 15cm ほどの冊子本（綴葉装か）。料紙、斐紙。軸頭は象牙。金銀箔散らしの裏打ち補修あり。毎半葉 8 行、和歌 2 行、詞書 2 字下げ。字高、約 18.3cm。撰者名注記、隠岐本符号なし。奥書・識語なし。蔵書印なし。

巻頭を欠き、812 番歌の詞書から始まる。815 番歌の上句「たまのをのながきためしにひく人も」の次が 818 番歌の下句「けふのあはれはあすのわが身を」になっている。間に紙の継目があるため、1 丁分の落丁が想定される（掲出箇所）。

寛文 5 年（1665）の古筆勘兵衛による折紙、「這新古今和歌集〈八之内／壺巻〉／一覽仕候 後醍醐天皇御／宸翰無紛者也為後証／染錐毛畢／代金子参枚可仕候／寛文五曆 小春下旬 古筆勘兵衛（守／村）（花押）」。

同極札、表「後醍醐天皇 〈後朱雀院かくれ〉一卷（守／村）」、裏「（了任）」。（田口暢之）

04『新古今和歌集』（脱落あり） 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 綴葉装 1 帖 〔鎌倉後期〕 写

登録番号、1420269。真名序欠。仮名序「しかのみならずたかき屋に」（ただし 1 オは紙面擦過により判読困難）から 1937 番作者名まで存。表紙なし。縦 25.8cm×横 18.3cm。内題「新古今和歌集巻第一（～二十）」。

料紙、楮紙。12 括（枚数、8（最初の 4 枚欠）・8・7・9・7・7・7・7・8・8・8）。毎半葉、仮名序 12 行、本文 12 行（ただし、終わりの 2 括は 13～16 行）。和歌 1 行（詞書 2 字下げ）。字高、仮名序約 21.8cm、本文約 22.0cm。奥書なし。蔵書印なし。黒の漆箱入（箱書なし。本よりもかなり大きく、転用された箱か）。付属の包紙に「仙台侯旧蔵本」、「鎌倉時代鈔本也」とあり。

残存状況は以下のとおり。691 詞書～701 詞書、824 詞書～831 歌、950 歌～969 歌、1118 詞書～1139 作者、1283 詞書～1293 作者、1670 歌～1738 作者、1937 歌～1978 歌、欠（落丁などの物理的要因による）。816 詞書の途中から目移りで 817 詞書となり 816 歌、欠。204・935・1026 は詞書・作者・歌、欠。387・386、602・601、755・754 の順。445・446 は歌順と詞書と作者に問題、456・455・457、513・512 の順で作者に問題。1930 詞書中の「ちる花に」の歌を改行して、独立した歌として書く。また、1569 の

次に「題不知 能因法師」として「かくしつゝふけゆく秋も老ぬればしかすがにこそかなしかりけれ」とあるのは 548 の重出。

切出歌の 1979・1980・1984・1986・1988・1989・1990・1991・1992・1993・1994、異本歌の 1999（紅梅文庫旧蔵八代集本に所収）・2001（同上）が含まれ、注目される。掲出したのは 1999 番歌。左から 2 首目、「題しらず 山辺赤人／こひしくはかたみにせよとわが宿にうへし藤次（「波」の誤写）いま盛也」。

なお、他本によると、1979 には「承元四年九月止之」、1986 には「入金葉集之由云云」、1991 には「入拾遺集之由、権中納言源朝臣申之」と注記されている場合がある。そのため、1979 を持つ当該資料は承元 4 年（1210）9 月以前の姿を留めていると見られる。また、勅撰集は同一の歌を重複して採らないのが原則であるため、『金葉集』（三奏本・秋・220・恵慶）に入集した 1986 番歌や、『拾遺集』（雑賀・1169・貫之）と『金葉集』（初度本・賀・458）に入集した 1991 番歌が含まれているのは未精撰の状態を窺わせる。同時に、それぞれが『金葉集』二度本や『拾遺抄』には入っていない点も興味深い。（田口暢之）

05『新古今和歌集』 後鳥羽院下命・源通具等奉勅撰 綴葉装 1 帖〔江戸初期〕写 * 伝小堀正之筆

登録番号、1379304。9 括り（各枚数は 19（最初の 1 丁は表紙に綴じ込み、次の 1 丁は見返し）、18、19、18、19、19、19、18、19（末 2 丁は表紙に綴じ込み、最後から 3 丁目は見返し））。後補牡丹唐草文様金欄表紙、縦 21.1cm×横 15.3cm。外題、表紙中央に金箔散らし題簽（縦 12.9cm×横 3.0cm）を貼るが、文字は記されない。内題、真名序の冒頭に「新古今和歌集序」、各巻頭に「新古今和歌集巻第一（～二十）」。本文料紙、斐紙。見返しも同じ。1 ウから真名序、ついで仮名序、本文の順に書写。毎半葉 8 行。和歌 1 行。詞書、約 3 字下げ。字高、約 19.5cm。奥書なし。蔵書印なし。

極札（縦 14.3cm×横 2.1cm）が付属するが、虫損が激しい。表「小堀〔大〕□〔政〕之（新古今和歌集／真名仮名序共）（琴／山）」、裏「〔春〕〔 〕／〔 〕は」全部一冊（壬／申）八（了意）。極札の包紙「小堀大膳政之筆（新古今和歌集／一冊全部）極」。

複数箇所錯簡があるが、それによる本文の脱落はない。ただし、誤写によって 326 番の作者名と和歌、および 1610 番歌を欠く。一方、1784 番歌の次に「太神宮歌合に 太上天皇／おほ空に契る思ひの年もへぬ月日もうけよ行末の空」という異本歌（1996）が見える（掲出箇所）。なお、『新編国歌大観』の掲げる「正保四年板廿一代集」では 1782 番歌の次となっており、配列がやや異なる。また、後出歌も 1801 番歌の次に 1992 番歌、1913 番歌の次に 1994 番歌が見える。（田口暢之）

06『新古今和歌集』 真名序・仮名序・20 巻 源通具等奉勅撰 袋綴 2 冊〔江戸前期〕写

登録番号、1421888・1421889。後補布目地菜の花色桜花散稿文様艶出表紙（26.1×20.4 糎）。表紙左肩斐紙短冊「新古今和歌集 上（下）」（本文別筆）。見返し、本文共紙。遊紙、上下冊共前後各 1 丁。序題、「新古今和歌集序」（真名序）。内題「新古今和歌集」。料紙、楮紙。行数、真名序 11 行、仮名序 12 行、本文 13 行。字面高さ、約 22.8 糎。1 首 1 行書。墨付、上冊 107 丁、下冊 97 丁。奥書は以下のとおり（〔 〕内は伊倉注、柳瀬本は【参考文献】の底本）。(1)～(4)は上帖末、(5)は下帖末にあり。

(1)〈本云〉承元三年六月十九日書之、／同七月廿二日依 勅定被改直之、

(2)〈同云〉弘長二年十月廿五日以證本（祖父／自筆）校合畢、後〔彼力〕本／上下二帖也、
表紙有四季絵、無表書、料紙白紙、

(3)〈同云〉建治二年（丙／子）三月廿八日校合畢、宗將奥書／迷然〔柳瀬本：半點^{（宗匠力）}如本^{（如本）}〕無勘失、
此本前藤原大納言為氏卿秘本也、／尤可為證本坎、仍以愚筆構之、

(4)〈堯孝法師自筆定〉此草子古弊之間閑直之、加修理畢、／延文二年三月十日 頓阿（在判）

(1)は藤原定家による奥書。(2)は「祖父自筆」云々とあり、(3)に「大納言為氏卿秘本」とあることから為氏の記した奥書とわかる。定家筆本上下二帖の表紙には四季の絵が施され、「表書」（外題力）はなく、また装飾料紙を用いたりせず「白紙」に書写されていたことを伝える。(3)の記者は不明。本文に乱れがあって文意が取りにくい、為氏を師とする者が「為氏卿秘本」「證本」と加証する。(4)は為氏筆本を入手した頓阿が修復を加えた由を伝える。「堯孝法師自筆定」は、その頓阿所持為氏筆本を曾孫の堯孝が書写したことを示すか。

(5)此集以 室町殿御本、京極中納言自筆／不違一字令書写畢、（但彼御本者／一首二行也、）

文正第一曆首夏中旬 日／校合畢 大僧正良鎮

(5)は良鎮（一条兼良男）による奥書。室町将軍家に伝来した定家自筆本を「不違一字」書写したという。「但彼御本者一首二行也」は定家筆本の一詩二行書を一行書に改めたということであろう。ここに言う「京極中納言自筆」本は、伝来の経路から推して上冊の「祖父自筆」本とは別本か。

上冊には撰者名注記（衛・有・定・隆・雅）が歌頭にあり、作者には勸物が付される。この勸物は『隠岐本古今和歌集』の底本である柳瀬福市氏蔵本（所在不明）の勸物と同一のもので、また上記奥書(1)～(4)も柳瀬本の下冊末に記されているものと一致する。但し、柳瀬本には、隠岐本に残された歌に付した合点、及び削除された歌に付した朱点が付されているが、本書では一部の合点を除いてそれらは保存されていない。一方、下冊には、上冊にある撰者名注記、作者勸物及び合点がなく、本書は上下冊取り合わせ本を底本とする転写本と推測される。なお、管見の及ぶ限り下冊と同じ奥書を持つ伝本を知らない。

切継歌（為相書写本後出歌）3首（新編国歌大観番号 1979、1988、1989）を含む。また、巻七・賀部の大嘗会和歌の 754（兼光）と 755（光範）を逆順にして、なおかつ大嘗会の催行年等を以下のように誤る。この異同については、『明月記』元久 2 年（1205）4 月 17 日条に「巳時参和歌所。昨日之残事猶々見之。大嘗会歌中、聊申事由承御定。」とあることと関連すると推測されている。

755 元暦元年・主基方 ……………（正）建久九年・悠紀方

754 同（元暦元年）・主基方 ……（正）寿永元年・主基方（伊倉史人）

【参考文献】三矢重松・折口信夫・武田祐吉校『隠岐本新古今和歌集』（昭和 2 年 9 月・岡書院）、後藤重郎『新古今和歌集の基礎的研究』（塙書房・昭和 43 年 3 月）、片山亨『『新古今和歌集』賀部・大嘗会 754・755 歌について一拮抗する二系統諸本一』（和歌文学研究 93・平成 18 年 12 月）

07『新古今和歌集』 真名序・仮名序・20 巻 源通具等奉勅撰 綴葉装 2 帖 〔室町後期〕写

登録番号、1376357・1376358。改装苔色地唐草宝尽文様裂表紙（24.0×16.6 糎）。表紙左肩打曇短冊「新古今和歌集巻口（上カ）」「新古今和歌集巻下」（本文別筆）。見返し、本文共紙。遊紙、上帖前 1 丁・後 1 丁、下帖前 1 丁・後 3 丁。序題、「新古今和歌集序」（真名序、巻末）、内題「新古今和歌集」。料紙、斐紙。毎半葉 10 行。字面高さ、約 17.4 糎。やや四周の余白が大きいのは、あるいは底本の大きさを示すか。一首一行書。墨付、上帖 11 折 128 丁、下帖 11 折 122 丁。下帖末に國學院大学図書館蔵伝源親行筆『新古今和歌集』と同内容の奥書を付すが少しく異同がある。今、〔 〕内に國學院本の本文を示す。

〈本云〉此集雖有書寫之志、云詞、云作者、依有八／本之相違、書出一卷之不寶〔審〕、貞應二年夷／則九日、進覽戸部尚書〈定家〉之處、以彼自／筆悉被用捨畢〔了〕、其詞云、炎暑之燈下、凌／汗校合愚本、令直付畢〔了〕、此上自筆〔自筆之〕誤、／非計略所及〈云々〉、仍終清書之微功、／專備隨分之證〔證本〕者也、于時、令〔金〕律初至、雖催潘氏之

〈本云〉興、珠汗猶深、屢類周勃之背而已、／朝請大夫源親行（花押）

「審」字の草書体は「寶」字に似ていかにも間違えやすいが、「不寶」では意味をなさず、内容を理解せず書写していることが窺える。「令律」も「前禪定法皇、當太金律之季商、早臥華藏之淨界、（前の禪定法皇、太金律之季商（＝秋八月）に当たり、早く華藏の淨界に臥す）」（昭訓門院藤原瑛子願誦文・鎌倉遺文・二二三六七・龜山院崩御佛事記）等の用例から「金律」が正しい。また、二つ目の「本云」は文の途中で不審。奥書前半で、親行は『新古今和歌集』を書写したいと思うものの、歌詞や作者につき、八つの伝本間で相違があるので、その不審点を一卷に書き出してみた」と記す。そして、貞應 2 年（1223）7 月 9 日、その一卷を定家のもとに送ったところ、定家は炎暑の夜、自ら筆を執って悉く疑問を解消してくれたという。したがって、親行本は定家の修訂が加わった重要な伝本ということになるが、國學院本には約 339 首（残存約 1639 首）に及ぶ欠脱がある。一方、本書は約 13 首（297・634 和歌・635 詞書・923 和歌・924 詞書・1200～1209）の欠脱があるものの、國學院本が欠く部分をほぼ補うことができる。但し、以下に示す不審点が見受けられる。まず、両本で歌順の違いを 3 ヶ所指摘できる。

・国学院本 春上・88・89・90 → 鶴大本 春上・89・90・88

・国学院本 恋三・1164・1165・1163 → 鶴大本 春上・1163・1164・1165

・国学院本 春上・1301・1302 → 鶴大本 春上・1302・1301

また、06 で見た大嘗会和歌について、國學院本と鶴大本では異なる（鶴大本が正しい）。

国学院本 755 元暦元年・主基方 754 同（元暦元年）・主基方

鶴大本 754 寿永元年・主基方 755 建久九年・悠紀方

さらに、國學院本は切継歌（為相書写本後出歌）を 1 首も含まない（但し、1983、1986 は欠脱部で確認できない）。一方、鶴大本は 3 首（1980・1984・1995）を含む。和歌の本文の対立するところが散見する。以上、本書が國學院本の転写本だとしても、忠実に書写されたものとは言えず、あるいは奥書のみが移写された可能性も考えるべきか（親行本奥書を校合本奥書として有する早稲田大学図書館蔵本〈二十一代集の内・へ 04 08099〉の例もある。武井和人氏指摘）。なお要調査。（伊倉史人）

【参考文献】高野辰之「源親行筆新古今集」（『古文学踏査』・昭和 9 年 7 月・大岡山書店）、池田利夫「鳳来寺本源氏物語の親行識語と書誌一桃園文庫蔵模本を通して一」（『創立三十周年記念 鶴見大学文学部

論集』・平成5年3月→『源氏物語回廊』・笠間書院・平成21年12月）武井和人「親行奥書本『新古今集』をめぐる」（『中世古典籍学序説』・平成21年8月・和泉書院）

08『新古今和歌集』 真名序・仮名序・20巻 源通具等奉勅撰 綴葉装2帖 〔室町中期〕写

* 伝真乗院僧正（宗一）・定法寺公助僧正筆・永禄3年（1560）三条西公条外題及び加証奥書

登録番号、1404553・1404554。深緑地金欄牡丹唐草文様表紙（25.5×17.1 糎）。表紙左肩朱色地龍紋題簽「新古今和歌集上（下）」（公条筆）。見返し、茶色の斐紙に金銀切箔・砂子・野毛散を散らす。遊紙、上帖前1丁・後9丁、下帖前1丁・後6丁。序題、「新古今和歌集序」（真名序）。内題「新古今和歌集」。料紙、斐紙。行数、真名序・仮名序9行、本文10行。字面高さ、約21.8 糎。1首1行書。墨付、上帖8折144丁、下帖8折131丁。各帖末に三条西公条の加証奥書が記されている。

〔上帖末〕右仁和寺真乗院僧正筆也、／一覽之次記之、／永禄三年仲秋下澣／稱名野釋（花押）

〔下帖末〕此集上卷真乗院僧正、至下卷者／定法寺公助僧正連枝之相並、蓋似／二王二陸者乎、于時永禄庚申仲春下旬／稱名野釋（花押）

下帖の書写者定法寺公助は三条実量男（定法寺は青蓮院の院家・公敦の弟・天文2年〈1533〉生存）。『新撰菟玖波集』の中書を行二法師、兼載法橋と担当したことが知られている（『実隆公記』明応4年〈1945〉6月6日条）。サントリーミュージアム蔵「酒伝童子絵巻」（狩野元信画）中巻の詞書の筆者（上巻：近衛尚通・下巻：青蓮院尊鎮）であり、京都清涼寺に伝わる「釈迦堂縁起絵巻」（伝狩野元信画）の筆者にも推定される。一方、上巻の書写者の仁和寺真乗院僧正は同じく実量男で公助の弟である宗一（覚遍・永正16年〈1519〉没）。他に典籍を書写した例を知らないが、文事にも関心が深かったのか、文明17年（1485）6月23日、徳大寺邸で宗祇による『源氏物語』帯木巻の講釈を三条西実隆、大炊御門信量、飛鳥井栄雅、姉小路基綱等と同聴した記録が残る（『実隆公記』）。また、奥書の記者称名野釈は三条西公条（実隆男・1487-1563・正二位、右大臣）。父譲りの能書家。依頼されて外題とともに記したものか、公助、宗一を「二王」（王羲之・王獻之父子）、「二陸」（陸機、陸雲兄弟・三国時代）に譬える。

切継歌（為相書写本後出歌）1首（新編国歌大観番号1979）を含む。巻七・賀部の大嘗会和歌の754（兼光）と755（光範）が逆順で、大嘗会の催行年等を誤るのは06と同様。

二重の桐箱に納められる。外箱の蓋に「新古今和歌集」、新詠の内箱の蓋に「新古今和歌集（上真乗院僧正筆／下定法寺僧正筆）二冊」と墨書する。（伊倉史人）

【参考文献】宮川葉子『三條西実隆と古典学』（平成6年4月・風間書房）

09『新古今和歌集』 真名序・仮名序・20巻 源通具等奉勅撰 綴葉装2帖 〔室町前期〕写

* 伝蜷川親元筆

登録番号、1357517・1357518。改装縹色地金欄燕子花・牡丹花の丸文様表紙（27.5×16.8 糎）。表紙左肩金銀切箔銀野毛散散らし題簽「新古今和歌集 上（下）」（本文別筆）。見返し、金箔を押した斐紙。遊紙、上帖前2丁・後1丁、下帖前1丁・後7丁。序題、「新古今和歌集序」（真名序）。内題「新古今和歌集」。料紙、厚手の楮紙。行数、真名序・仮名序8行、本文10行。字面高さ、約23.2 糎。1首1行書。墨付、上帖7折129丁、下帖7折124丁。但し、脱簡、錯簡が以下のようにある。上帖は316～323を欠く。下帖1500の次に上帖にあるべき395～403・214～222・387～394が混入し、次いで1704～1719（1705欠）があつて、その後に1501以下が続く。

二度本、切継歌（為相書写本後出歌）1首（新編国歌大観番号1994）を含む。

極札2種が附属する。ひとつは元禄9年（1696）の了珉によるもので、表に「蜷川新右衛門尉親元 新古今集上下 式冊（「琴山」印）」、裏に「〈上巻みよしのは／下巻よそにのみ〉真名序 假名序有之〈丙／子〉霜（「了珉」墨印）」と記される。今ひとつは古筆別家の某による極札で表に「蜷川新右衛門親元 〈新古今集／上下二冊〉（別家琴山印）」と記す（裏書なし）。親元の真跡資料（『日本書蹟大鑑』第8巻所収親元筆短冊及び書状断簡）と比較するに、本書の書写者に同定することはできない。

二度本、切継歌（為相書写本後出歌）1首（新編国歌大観番号1994）を含む。また、巻七・賀部755（光範）の大嘗会の催行年を元暦元年、主基方と誤る（正しくは、建久九年、悠紀方）。

桐箱入り。「第五百七號／貴重」というラベルが貼付されるが、旧蔵者は不明。（伊倉史人）

10『新古今和歌集』 真名序・仮名序・20巻 源通具等奉勅撰 綴葉装2帖 〔室町中期〕写

* 伝岩山民部澄秀筆

登録番号、1384622・1384623。本文共紙表紙（24.5×17.3 糎・表紙を剥がした痕跡あり）。表紙中央打付書「新古今和歌集上下／上巻（下巻）」。「下店蔵書」（「下店蔵書」印）下店蔵書」と墨書。いずれも旧蔵者（未詳）に拠るもの。見返し、本文共紙。遊紙、ナシ。序題、「新古今和歌集序」（真名序）、「新古今和歌集序」（仮名序）。内題、「新古今和歌集」。料紙、楮紙。行数、真名序 9 行、仮名序 11 行、本文 11 行。字面高さ、約 21.5 糎。1 首 1 行書。墨付、上帖 7 折 134 丁、下帖 7 折 128 丁。惜しくも上帖末は一折（930-989）を欠く。

切継歌（為相書写本後出歌）12 首（新編国歌大観番号 1979・1980・1981・1982・1983・1984・1985・1986・1987・1988・1989・1995）を含む。下巻末に隠岐本の跋あり。但し、本文注に隠岐本の削除符号等はない。巻七・賀部の大嘗会和歌の 754（兼光）と 755（光範）が逆順で、大嘗会の催行年等を誤るのは 06 と同様。

井狩源右衛門による極札が附属する。表に「岩山民部澄秀 やまとうたは（墨印）」、裏に「新古今上下 乙丑二（「井狩」墨印）」と記す。澄秀は道堅（足利義尚近臣）の息（『顕伝明名録』）。立正大学図書館に岩山民部澄秀を伝承筆者とする（浅倉茂入による鑑定・切出歌を 17 首含むという）『新古今和歌集』が所蔵されているが、別筆。立正大学本は國學院大學蔵岩山入道宗珍筆『古今和歌集』〔天文 8 年写〕と同筆。渡邊裕美子氏は、宗珍を澄秀の法名かと推測する。それに従うと、本書は岩山民部澄秀の書写本とは言えないということになる。また、箱書に「岩山民部少輔本」と記される国文学研究資料館懐風弄月文庫蔵『新古今和歌集』（92-1-1~2）とも別筆。（伊倉史人）

【参考文献】渡邊裕美子等「立正大学図書館第五十回記念展「法華経と文学」展示書目解題」（立正大学國語国文 61・令和 5 年 3 月）

11『新古今和歌集』 真名序・仮名序・20 巻 源通具等奉勅撰 綴葉装 2 帖 〔江戸初期〕写

* 伝富小路氏直筆

登録番号、1437522・1437523。香色地金欄蜀江錦文様表紙（14.2×15.0 糎）。表紙左肩朱色竜紋題簽「新古今和歌集上（下）」（本文別筆）。見返し、布目金紙。遊紙、上下帖とも前後各 1 丁。料紙、斐紙。序題、「新古今倭調集序 中納言親経作」（真名序・下帖末）。内題、「新古今和歌集」。料紙、斐紙。行数、真名序 9 行、仮名序 9 行、本文 11 行。字面高さ、約 20.5 糎。1 首 1 行書。墨付、上帖 6 折 154 丁、下帖 6 折 144 丁。また、1475 を欠く。下冊末に寛永 10 年（1633）の奥書極あり。

温舊知新之和歌集上下／富小路氏直（三源一覽之作者）揮紫／毫、遂全部之功、耽道志／可以見、

寔賞心樂事之龜鑑者也、可謂秘在耳／寛癸酉仲秋吉辰特進藤（花押）

奥書の記者「特進（正二位の唐名）藤」は烏丸光広（1579～1638、正二位、権大納言、能筆家）か（花押が異なるか）。富小路氏直（?～1535、従三位、弾正少弼）筆と極めるが、真跡資料と比べると氏直筆とは言いがたい。また、『三源一覽』は氏直の父俊通の著した『源氏物語』の注釈書であって、氏直を作者とするのは誤り。「賞心樂事」（風景を賞美する心と愉快な事）は真名序中に見える句（『文選』巻 15・謝靈運「擬魏太子鄴中集詩序」を典拠とする）。

切継歌（為相書写本後出歌）3 首（新編国歌大観番号 1987・1989・1994）を含む。

桐箱入り。蓋に「氏直筆／新古今」と墨書する。（伊倉史人）

12『新古今和歌集』（断簡） 後鳥羽院下命・源通具等撰 1 葉 〔鎌倉時代初期〕写

* 伝寂蓮筆 * 古筆手鑑所収

登録番号、1327011。風格を備えた特上の古筆手鑑に貼付されている、全 367 点の古筆切や短冊等の中の 1 点。元卷子本、縦 28.2 cm×横 14.0 cm。上句の字高 23.9 cm。料紙は白斐紙。行間を広く取った大変贅沢な書式で、藤原隆方の歌 1 首及び次歌の詞書「題不知」という都合 4 行分を謹直に書写している。その寸法・書式・筆蹟などから当該断簡は『古筆学大成』所収「伝寂蓮筆 新古今和歌集切（二）」などのツレとみて間違いないものである。

この伝寂蓮筆『新古今集』卷子本切については、久保木・中川博夫『新古今和歌集の新しい歌が見つかった！』（2014 年 10 月、笠間書院）、及び久保木『新古今和歌集の新しい歌が見つかった！』その後」（『リポート笠間』No.60、2016 年 5 月）において詳しく論じたように、当該断簡を含め、これまでに合わせて 15 葉を見出している。またさらにその後、ツレの可能性のある 2 葉の伝存にも気がついている（1 葉は模写）。それらの中でとりわけ当該断簡が極めて重要視されるのは、記載の隆方詠 1 首がこれまで『新古今集』の歌としてはまったく知られていなかったものだからであった。ツレはほとんどが巻 11・

恋 1 に所属、よって当該断簡も同巻のうちであったと予想されるが、ところが実際には同巻にも他巻にも、あるいは従来知られている『新古今集』のいわゆる異本歌の中にも見出されないのであった。それでも当該断簡が卷子本切のツレであることは書誌的特徴から確実に視され、よって以上を考え合わせれば、要するに当該断簡はおそらくはかつて『新古今集』の巻 11 に入集しており、その後切り出されることとなった、従来まったく知られていなかった異本歌だったと推断されるというわけである。『新古今集』異本歌の新出はここ何十年も報告されていなかっただけに、たった 1 首ながらも極めて貴重であると言い得る。

さらにこの卷子本切に関しては、委細は前掲論考に譲るものの、『新古今集』の一応の完成を祝して元久二年（1205）に行われた竟宴の、その竟宴に際して製作された竟宴本に極めて近い 1 本だったか、さらに言ってしまうと竟宴本そのものだった可能性もありそうである。その場合、現状他本には見出し得ない当該断簡の記載歌は少なくとも竟宴の時点では『新古今集』に入集していた、まさしく『新古今集』成立最初期の 1 首だったということになる。

なお先に「ツレはほとんどが巻十一・恋一に所属」と記して「ツレのすべてが」とまでしなかった（できなかった）のは、1 葉だけ判断に迷う断簡があるからである。すなわち前掲「その後」で紹介した昭和美術館蔵手鑑『若菜集』所収の詞書のみの 1 葉である。記載内容からすると、これは『新古今集』巻 6・冬・552「かみな月風に紅葉のちる時はそこはかなく物ぞかなしき」という藤原高光詠の詞書と判断される。これは確かに冬歌であり、恋 1 に配される恋歌とみるのは非常に難しい。ただそうすると卷子本切は巻 11 以外に巻 6 も伝存・分割されていたことになるのだが、現状他のツレで同巻の歌に一致するものが 1 葉たりとも見出されていない点、巻 11 と同様に巻 6 が少なくとも江戸時代初期頃まで伝存し分割されていたようだと、書誌学的な立場からするとなかなか言い出しにくいのもある。上述のとおり竟宴本そのものという稀覯中の稀覯の古写本だった場合にはなおさらで、このあたり結局は今後もツレを博搜発掘していくほかに解決方法がないようである。（久保木秀夫）

13『風雅和歌集』真名序・春上（断簡） 光厳院親撰・花園院監修 2 巻 〔南北朝時代〕写

＊尊円親王筆

登録番号、1404551（真名序）、1404552（春上断簡）。『風雅和歌集』真名序の 1 巻と、春上 82 番作者から 90 番歌までの 29 行分。真名序は、縦 28.0cm×横 21.3cm の古裂表紙（見返し全面に金箔をあしらう）に、本文料紙三枚（48.9cm、50.4cm、40.4cm、軸継紙 7.4cm）を継いで、全長 147.1cm。字高、約 22.0cm。軸頭は象牙。若干虫損あるも、修補済み。奥書・識語等なし。春上の断簡は、縦 27.5cm×横 24.3cm の薄緑色地古裂表紙（見返しに金銀切箔砂子銀野毛などをあしらう）に、本文料紙三枚（47.5cm、22.2cm、45.2cm、軸継紙 19.3cm）を継いで、全長 158.8cm。字高、約 22.0cm。軸頭は紫檀。本文料紙は、どちらも斐楮交漉藍打曇料紙。奥書識語あり「此第一巻去年十一月五日／書進 仙洞同九日竟宴之／時被披講了而少々被添／削之上料袋下品之間重加／清書仍返賜此本者也貞和／三年六月廿日記之」（尊円筆）「傳領臨池不才（花押）」（尊応筆か）。尊円（伏見天皇皇子。永仁 6 年〈1298〉～延文元年〈1356〉、59 歳）の奥書・識語によると「この春の上の一巻は昨年 11 月 5 日に仙洞（光厳院）に書き進められ、同月 9 日に竟宴が行われた際には、披講に供された本であったが、その後少々添削がなされ、料紙があまりいいものでなかったため、改めて清書を行った。それによりこの本はこちらに返し賜ったのである」というもので、同様の料紙の真名序も、竟宴の時に披講されたものと見てよいものであろう。本書は、国文学者久曾神昇（1909～2012）の旧蔵書であるが、その手許で両者は一具になったものと考えられる。勅撰和歌集の竟宴の場で実際に披露された本として重要な意味を持ち、その資料的価値は極めて高い。（石澤一志）

14『風雅和歌集』真名序・仮名序（模刻） 花園院撰 袋綴 1 冊 〔江戸前期〕印

＊尊円親王筆本模刻

登録番号、1435649。縦 26.8cm×横 17.7cm。紙縫綴。本文料紙は楮紙。本文共紙表紙、そのやや右上に外題「風雅和歌集 全」と直に刷る。一面 4 行、字高約 22.0cm。保存状態は並、若干の虫損が見られる。本書は尊円親王筆『風雅和歌集』真名序・仮名序の模刻本で、「真名序」（1 オ～6 オ）「仮名序」（7 オ～17 オ）、奥書・識語（18 オ・ウ）の順に記す。おそらく、真名序・仮名序が卷子本 1 巻に書写されていて、それを模刻したものであろう。ちなみに、この模刻された元の本と思しき真名序の古筆切が 2 葉知られており、うち 1 枚は模刻にも見られる、本文に文字が補入されている部分で、これが一致する。古

筆切には極め札（鑑定書）が附属しているが、2枚とも古筆了榮（古筆本家2代目、1607~1678）のものと考えられ、その没年の延宝6年（1678）以前に、模刻本の親本は断簡化していると考えられることから、模刻の本書もまたそれ以前の段階での刊行がなされたと考えられるべきであろう。『風雅和歌集』真名序については、本学蔵の1本のほかにも、東北大学に1本が知られるなど、いくつかの伝本が知られるが、こと仮名序に関しては、古筆切も含めて本書が初めてのものであり、その意味でも大変貴重なものと言える。なお、奥書・識語は「此集者 上皇御自撰也此序者／法皇之宸草也清書事依當／其撰愁染愚筆仍為書定字様／所令成此草也貞和二年十一月一日記之（花押）＊尊円」というもので、これは宮内庁書陵部蔵二十一代集のうち、兼右本として知られる 510・13 本の上巻末に記されているものと同文である。これがどのような経緯で、兼右本に記されたのかについては現時点では不明であるが、今後の解明を期したい。（石澤一志）

15『金沢文庫本万葉集』（断簡）1葉 〔鎌倉後期〕写 ＊金沢文庫切 ＊伝尊円親王筆

登録番号、1406437。縦 32.6cm×横 8.9cm。万葉集巻 19・4169 番歌の末尾 37 字と、本文末の訓注 8 字を小書きで記した 3 行から成る断簡。縦 32.6cm×横 8.9cm。本文料紙、斐紙。天地に金界を引く。界高は 27.6cm。一行 17 字。古筆了佐による極札「青蓮院殿尊円親王（琴山）」（縦 11.3cm×横 1.8cm）を添える。

『校本万葉集』等に掲出のない新出の断簡ではあるが、金沢文庫切は比較の数も多く、仙覚校訂本系統であることから、古筆切としての価値は必ずしも高いとはいえない。以下、当該断簡の資料的価値について述べる。

金沢文庫本万葉集は、仙覚校訂本系統の一伝本であり、本文の右に片仮名で訓を伴う、いわゆる片仮名傍訓本である。ところが、金沢文庫本の一部であるはずの本断簡には訓がない。

訓のない断簡は、当該断簡の他に、『古筆学大成 12』に画像の載る白鶴美術館蔵手鑑の中の一葉（巻 1・29~30）、久曾神昇『私撰集残簡集成』に画像の載る個人蔵の一葉（巻 19・4145）、大英図書館蔵『御手鑑』中の一葉（巻 19・4164）と、掲出の一葉を含め、計 4 葉が確認できるのだが、巻一も巻十九も石川武美記念図書館に完存しており、断簡が存するはずがない。

小松茂美は、巻一に無訓断簡一葉が存する経緯について、石川武美記念図書館に伝存する金沢文庫本巻一の筆跡が他の巻と異なることから、

- ・『金沢文庫本万葉集』の書写完了後に、何かの事情で、加点のチャンスを失い、しばらくの間、無点本のまま放置されていた。そのうちに巻第一のみが所在を失う。
- ・二年か三年か、あるいは五年、十年の後であったか、巻第一の一冊を佚亡した金沢文庫本万葉集を手にした人物が巻一を補入し、無点の金沢文庫本万葉集すべてに片仮名の訓を施した。
- ・一方、流出した無点本の巻第一は、江戸初期の頃にまで流伝して、古筆愛好の波をうけて、切断分蔵されることになった。その中の一葉が奇跡的に残ったのが巻一の無訓断簡一葉である。

と推定した（『古筆学大成 12』P.441）。

ただ、巻十九については、佐佐木信綱旧蔵本（現石川武美記念図書館蔵本）を実見できなかったよう判断を保留しており、巻十九の断簡は長らく模写や臨写と見なされてきた（『校本万葉集 新增補追補』等）。

ところが近時、佐々木孝浩氏によって慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に江戸初期写の金沢文庫本万葉集巻十九 1 軸が収蔵された。縦 33.2cm、横 50.2-50.5cm の料紙一葉に 16 行を記し、8 行目と 9 行目の間に 1 行分の空白を置く。もと綴葉装であった際の、行詰め、字配りを忠実に写してあると思われる。天地に金界があり、界高は 27.8cm。大きさ、金界、筆跡とも金沢文庫本と見紛うばかり本なのだが、この本も無訓なのであった。さらに、斯道文庫蔵本では、4155 番歌~93 番歌が脱落しており、当該断簡の掲載歌は欠脱箇所に含まれる。すなわち掲出の断簡は斯道文庫蔵本の祖本の一部、言い換えれば、遅くとも江戸初期以前に存した無訓の金沢文庫本巻十九の一部であると考えられる。

時代の特定は難しいものの、江戸初期以前に無訓の金沢文庫本が存したという事実は、金沢文庫本の成立に小さからぬ問題を投げかける。

金沢文庫本は文永三年本のうちでも比較的古い本文を伝える。また、題詞を歌より低く記すという形態も、文永年間以前に行われた初度の仙覚校訂本の体裁に一致する。一方で、訓は文永十年本である寂印成俊本の系統に近い。本文と訓の由来が異なるとすれば、小松が巻一に関して推定したように、金沢文庫本の巻十九もまた、ある時期まで無訓で存在し、本文の書写に遅れて訓が付された可能性—すなわち金沢文庫本巻十九が成立に近いある時期に無訓で存在した可能性—が浮上してくることになる。

現時点で無訓の断簡が確認できるのは巻一と巻十九のみであり、金沢文庫本 20 巻の問題なのか、当該 2 巻の問題なのかは不明である。無訓の金沢文庫切の新たな出現に期待したい。（新沢典子）

【参考文献】

「萬葉集諸本並びに断簡類の解説」『校本万葉集十八 新增補追補』(1994 年、岩波書店)、森井信子「大英図書館蔵「御手鑑」の報告」(『国文鶴見』第 37 号、2003 年 3 月)、田中大士「金沢文庫本万葉集系統論序説」(『萬葉』第 231 号、2021 年 3 月)、村田右富実「『校本万葉集』において校合の対象となっていない断簡類」(『萬葉』第 236 号、2023 年 10 月)。

16『和漢朗詠集』藤原公任著 卷子 2 軸 〔鎌倉中期〕写 * 伝後京極良経筆

登録番号、0318651・0318652。見返し、縦 30.2cm×横 23.0 cm (金銀切箔・霞引き)。次に 38 紙 (巻上)、36 紙 (巻下) が継がれている。

料紙の横幅は巻下の末尾 (一紙) のみ 13.3 cm。その他、巻上は 42.3～48.4 cm 程、巻下は 45.8～51.3 cm 程。本文料紙、斐楮交漉紙。薄墨による界が天地に施されている。字高、25.7 cm。

内題については、巻頭には巻下のみ、「和漢朗詠集下 雑」とあり、巻末の巻上、巻下にはそれぞれ「和漢朗詠集上」、「和漢朗詠集下」と書されている。外題・奥書、なし。

古筆了佐 (1572－1662) の手による折紙、あり。そこには、「後京極殿良経公卿真跡」と書されており、末尾の署名「古筆」の下には黒印 (「琴山」) が押されており、「了佐」の下には花押が書されている。

本作品 (以下、「鶴見本」と略記する) は横浜市指定有形文化財に指定されている。

鶴大本は、巻上・下、一筆による威風堂々たる後京極流の書風である。後京極良経 (1169－1206) を伝称筆者とする『和漢朗詠集』の写本には、この鶴大本の他、常知切・内侍切・嵯峨切などが現存している。佐竹本三十六歌仙切・紫式部日記絵詞・豆色紙も伝後京極良経筆とされる作品である。写本の数のことに加え、書写内容も様々であり、そこから当時流行の書風であったことが知られる。

その書の特徴は、「都」・「中」に見られる縦画の反り方、「暑」・「者」の斜画 (左払い) の長さ、反り方などに認められるが、鶴大本は、特に常知切の書に類似している。

例えば、「月」の一画目 (左払い) の反り方、「口」の二画目の転折以降、「夏」の最終画 (右払い) の反り方やその長さ、運筆の仕方などが特徴的である。漢字のみならず、変体仮名の「可」・「春」に見られる鋭さ、「く」の末尾及びその下に位置する文字への続け方にもその書風の特徴が認められる。それらは特異にも感じられるが、作品全体の統一感とともに視覚的变化を与え得る表現手法として効果的である。

藤原公任 (966－1041) の撰とされる『和漢朗詠集』は当時を代表する作品の一つである。いわゆる完本、零本、切 (断簡) を合わせると、平安時代の書写と推定されている写本 (以下、「平安時代書写本」と略記する) だけでもその現存数は三十余種に上る。鎌倉時代以降、さらに多くの写本が制作された。そのように、多くの人々によって書き継がれ、享受された中で、原本 (公任の撰) から変容したであろうことが先学の研究によって指摘されている。その要素は以下述べる通り、鶴大本の中にも見出し得る。

現存する平安時代書写本の中には (後人による補筆、除く) 確認し得ない詩歌句 (二句と二首) を鶴大本は有している。それらは後人による加筆 (原本には存在しない) とされているものであるが、注目されるのは、そのうちの「家夾江河北岸」句 (巻下「遊女」) である。調査し得た鎌倉時代の書写と推定されている写本 (以下、「鎌倉時代書写本」と略記する) のうち、当該句が、書き込みなどではなく、他の詩歌句と同様に書されているのは、鶴大本のみである。

また、原本に存していたと推測される詩歌句の全てを有する写本は、現存する平安時代書写本の中には見出し得ないものの、鶴大本はその全てを有している。

一方、鶴大本は、①「はるかすみ」歌 (巻上「立春」の末尾に位置する)、②「いかにわれ」歌 (巻下「庚申」の末尾に位置する) も有する。①は重出歌であり (巻上「霞」にも存する)、②は後人による加筆とされている和歌である。①は戊辰切、②は安宅切・卷子本・藤原定信筆大字切にも存する。それらは、いわゆる世尊寺家及びその書の影響を受けた人物の手によるとされている『和漢朗詠集』の写本であり、書写年代は 12 世紀であると推定されている。

校合の結果、個々の本文についても、それらの写本との一致が確認されたが、殊に、鶴大本と戊辰切・卷子本との同文箇所が目立つ。

鶴大本の本文の中には、平安時代書写本とは異なり、鎌倉時代書写本と一致するものも見られるが、その箇所数は多いとは言えず、鶴大本の書写内容について、平安時代から鎌倉時代へと変わりゆく、その移行期に位置していると考えられる。

他本では、各詩歌句の末尾に注記が認められるが、鶴大本においてはその殆どが省略されており、その点は惜しまれる。しかし、鶴見本の詩歌句数は多く、集成的であり、その書風からも由緒ある、資料的価値の高い作品であると考えられる。(山本まり子)

Ⅱ 物語—伊勢物語・平家物語—

17『伊勢物語』 綴葉装 1 帖 〔室町時代後～末期〕写 * 伝小堀遠州筆（藤原定家筆本の模写）

登録番号、1058174。縦 17.5 cm×横 17.9 cm。藍色地に唐草文様織出しの後補裂表紙。外題なし。料紙は斐紙、遊紙前後 1 丁ずつ。シミや少々の虫損あるも全体的には状態良。

伝称筆者を小堀遠州とする箱書や鑑定文書複数が存するが、遠州ないし某人による単なる定家様の写本などといったものではなく、とある時点まで伝存していた定家真筆本を臨模した 1 本であると推断されること、池田利夫『藤原定家筆蹟模本 伊勢物語の研究』（2009 汲古書院）において書誌学的・国語学的な種々の徴証に基づきながら緻密周到に論じられている。また『伊勢物語』の定家本には天福本・武田本など数種があるとされている中、当該本の本文はそのいずれにも一致しない極めて珍しいものであることなども指摘されている。

ところで同書でなされている指摘のひとつに、当該本の百十一段において記載される 3 首のうちの 2 首までもが定家筆ではない別筆となっている（と模写を介してさえも知られる）ということがある。その理由について池田は、百十一段と『後撰集』とでは問題の 2 首の歌順が逆となっており、疑問を感じた定家がしばし空白としておいたものの、結局「どの本を調べても歌順同じなので、何かのついでに女房にでも空白部を埋めさせ」たものか、という推論を提示している。が、あるいは当該本の親本の段階で、すでにこの 2 首が欠落して空白となっていた（こうした事例は他作品ながらも実際に存する）、それをのちに他本によって定家が側近に補写させた、といったような可能性も考えられないであろうか。単なる憶測ではあるが一案として書き添えておく。そのほかなぜ当該本には奥書・識語の類が一切ないのか、なぜ他の定家本と較べて勘物が極端に少ないのか等々、気になるところはいくつも存する。なぜと問うても答えは出ないがこれからは念頭に置いておくべき点ではあろう。

ともあれ今後、当該本をいかに有効有益に活用していくか・いけるのがが、『伊勢物語』の伝本・本文に関する調査研究上の大きな課題となってくるはずである。（久保木秀夫）

18『伊勢物語』 綴葉装 1 帖 〔室町時代後～末期〕写 * 伝安楽庵策伝筆

登録番号、1082536。縦 18.5 cm×横 24.0 cmの横長本。梔子色地に瑞雲織出しの後補裂表紙。外題なし。見返しも後補で布目地に桐信夫草文様刷出し料紙。1 オ（白紙）左上に「誓願寺安楽庵筆（伊勢物語一冊／横折本）（「拝」の墨印）」という朝倉茂入の極札貼付。料紙は楮紙、全 4 括り、遊紙なし。ところどころに補修があるも、全体としては状態良。

伝称筆者の安楽庵策伝（1554～1642）は誓願寺五十五世、茶人・文化人として名を馳せた僧侶であり、笑話集『醒睡笑』の作者としても有名であるが、古写本ないし古筆切の伝称筆者とされることはかなり少ないのではないか。その点、あるいは策伝筆とする何らかの根拠があったかとも憶測される。

当該本はいわゆる百二十五段本と同じ段数・段序であるが、定家本の諸本ともまた百二十五段本に限らない非定家本の諸本とも一致しない、細かいけれども夥しい数の異文を有する。それらの中には時に「古本」と呼ばれるうちの 1 本と一致したり、時に「広本系」また「略本系」と呼ばれるうちの 1 本と一致したりもしているが、どれか特定の 1 伝本なり 1 群なりと著しく近似したりすることはなく、それどころか他には存しない独自異文も相応に見出されるようである。最も顕著な異同としては、百二十五段の最後「つゐにゆく道とは…」の 1 首のあとに「といひてつゐにみまかりけるとなり」という 1 文があるということが挙げられる。定家本を含む百二十五段本にこの 1 文はなく、「広本」とされる阿波国文庫本（宮内庁書陵部蔵）には「とてななんとえいりにける」、また「略本」とされる伝民部卿局筆本（「塗籠本」とも。本間美術館現蔵）には「とてなむたゑいりにけり」とそれぞれあるが、当該本とは一致しない。ほかにも当該本には単なる誤写誤脱では説明し切れない独自異文が散見される。

なお最終丁オモテ面右端に「哥百九十六首有」と注記されているが、実際に数えると 209 首であり、百二十五段本と一致する。これは注記の誤りであろう。

当該本はこのように、従来の分類の枠内に収めることなどできそうにない特異な本文を持った、注目すべき写本と位置づけられそうであり、既知の伝本群を視野に入れての今後の精緻な調査研究が必須であろう。ついでに述べれば上でわざわざ「古本」「広本」「略本」のように鉤括弧をつけておいたのは、従来のそうした分類そのものにも問題なしとしないからである。（久保木秀夫）

19『伊勢物語』 綴葉装 1 帖 〔室町時代中期〕写 * 伝中院通秀筆

登録番号、1283542。縦 22・3 cm×横 14.3 cm。老竹色地に金茶色唐花文様織出しの後補裂表紙。金色の後補題簽に「伊勢物語」と墨書。見返しも後補で金銀の切り箔・揉み箔・砂子散らし装飾を施す。料紙は緒紙。全 4 括り。墨付き 1 丁目ほか若干に相剥ぎされかけた痕跡あり。遊紙は前後に 1 丁ずつ。うち前遊紙オモテ面中央に「中院通秀公〈伊勢物語一冊〉（「牛庵」瓢箪型朱印）」という畠山牛庵（2 代目か）の極札貼付。本文は 1 面 9 行書き。地の文の字高 20.0 cm 前後。見開き両端及び地の部分の余白が狭く、裁ち落としによって整えられたものとみられる。ほか虫損と染みが少々。

本文は百二十五段本。一瞥定家本のそれに見えるが、定家本由来の奥書類も、またそれ以外の奥書類も一切持たない。かつとりわけ異文が傍書されているところを点検すると、12 段「よめりけるを」（当該本）—「よみけるを」（定家天福本）・14 段「くりはらやあねはの松の」（該）—「くりはらのあねはの松の」（天）・26 段「さくはかりに」（該）—「よりし許に」（天）・99 段「しるへかりけれ」（該）—「しるへなりけれ」（天）などのように、本行本文ではなく傍書のほうが定家天福本とほぼ一致している。またこうした異文を含め、当該本には本文とは別筆にて集付や勘物が随所に見られるが（若干迷うがおそらく 1 筆）、これらもほぼ天福本と一致しているようである。要するに当該本は百二十五段本ながらも非定家本のうちの一本であり、のちに某人によって天福本との校合が為され、異文や集付、勘物等が書き入れられたという伝本だったと推察される。

未精査ながらも当該本の本文は、百二十五段本の中でも定家本とは異なる本文を持った「古本」と一括される本文群のいずれかに近いもののようである。古本は多く鎌倉時代の古写本であり、当該本のような室町時代の写本というのは、従来認知されていた中ではかなり珍しいのではなかろうか。ただしあるいは数多く伝存している室町写本の本文が詳しく調べられていないだけであり、今後まだまだ発掘できそうでもある。そして当該本から気づかされるのは、奥書・識語を持たない室町写本は要注意ということである。とりわけ定家に関わるそれらが無い写本については（転写の際に省略される場合がないわけではないものの）珍しい本文を有している可能性が決して低くはなさそうである。こうしたヒントを与えてくれるという点でも当該本は実に有益と言うことができよう。（久保木秀夫）

20『伊勢物語』 袋綴 2 冊 寛永 6 年（1629）刊 * 後印

登録番号、10921234。縦 26.8 cm×横 19.2 cm。三重菱繋ぎ地の濃縹色表紙、原表紙か。外題はないものの上冊ではオモテ表紙の左上、下冊ではウラ表紙の右下に題簽の剥落痕が視認される。改装時すでに題簽が欠けていたため、下冊において表紙のオモテとウラとが取り違えられたものと推察される。本文料紙は楮紙。総裏打ちの補修あり。版木の版面以外の部分に付着した墨による汚れ、またしみや掠れも散見されるが摺りの状態は比較的良好である。ほか特に上冊の前半部分、行間にまま朱で簡潔な注釈が書き入れられている。

下冊末尾に慶長 9 年の刊語があり、『伊勢物語』のいわゆる根源本の識語の冒頭などを引用しつつ、藤原定家の天福本を「寛永己巳孟夏日」（＝寛永 6 年 4 月）に中院通勝が校訂し、かつ挿絵をも加え上下 2 分冊として刊行した版本を、さらに校訂して刊行した旨が記されている。しかし片桐洋一編『伊勢物語 慶長十三年刊嵯峨本第一種』（1981 年 9 月、和泉書院）などに指摘があるとおおり、これは慶長 13 年（1608）刊のいわゆる嵯峨本のうち第 4 種とされる版の刊語とほぼ完全に同文で、わずかに年記（「慶長庚戌孟夏日」＝慶長 13 年）のみを差し換えたというものである。かつ実際この寛永 6 年版本については、挿絵を嵯峨本からそのまま転用している事例として言及されることがままある。

一方で非常に興味深く思われるのは、その本文の書式である。江戸時代の整版本は、1 面行数や行間・字間といった書式が基本的には一定していると言えようが（もちろんそうでない事例も多数あるが）、この寛永 6 年版本においては面によって行数が 8～12 行とさまざまであり、和歌も 1 首 2 行書きもあれば 3 行書きもあり、それに合わせて行間・字間にも広狭が生じている。

それに関わり気づかれるのは、ほぼ全丁に亘ってオモテ面とウラ面との境目で、本文が中途半端とならないように版下が作られているということである。換言すれば、和歌の上句と下句が分かれたりすることがない、また例えば一文が終わるところ、そうでなくても文節で区切れるところでオモテ面（＝見開き両面の左面）がほぼ終わっているということである。また挿絵の前後でも本文や和歌、あるいは章段全体が終わるようになっていくのはご愛敬、ともあれこれは書写態度として明らかに意図的なものと判断される。

なお大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇 索引篇 図録篇』(1961年12月、有精堂出版株式会社)「古版本聚影解説」の「第七五図 寛永六年版伊勢物語」では、同本の「本文の行数・字詰・版式等」が、ひとつ前に紹介されている「第七四図 刊年末詳版伊勢物語」(非絵入り本)に「類似している」との指摘がある。かつ「桃園文庫蔵」というその無刊記版の見開き2面分の図版も掲載されており、当該本と比較するに確かに完全に一致している。となると自ずと前後関係が問題となるが、桃園文庫本は未見であるので今は何とも言えないところ。ただし如上の書式は挿絵があることを前提としたものと考えないと、いささか理屈に合わないかとは思われる。一方で無刊記版には寛永6年版にはない本奥書ふたつがあるとのことで(この奥書もまた問題なのだがここでは省略)、そう単純でもないようであり、まだまだ検討を要するところ。

いずれにしても当該本は、これより以後の整版本の言わば標準化・類型化された版面とは異なって、丁をめくるたびに書式が変化し、挿絵と相俟ってずっと見ていたくなるような実に好ましい1本である。それまで主流だった写本が時に体现してきた、書写なればこそその自由自在さ・融通無碍さを思わせもする。写本から版本へという過渡期、書物文化の大転換期ならではの産物であるとも言えようか。(久保木秀夫)

21『源氏物語』抜書 紅葉賀・花宴 伝青蓮院尊応筆 〔室町後期〕写 軸装1幅

登録番号、1243435。藍と紫の内曇斐紙(縦33.5×横49.5 糎)に柳・牡丹・蝶・霞等の下絵を金銀泥にて描く豪華な料紙使用。箱に加賀前田家旧蔵の貼紙あるも、その実否を確認できない。現在1紙分のみ残るが、制作当初は大型巻子の贅沢な調度手本であったろう。紅葉賀巻より「からひとの」の歌、花宴巻より朧月夜との出会いの場面を書き抜く。伝称筆者の尊応准后(?~1513)は二条持基の子、青蓮院門跡・天台座主を務め、後十楽院と号した能書であり、その筆跡は後代に継承され、尊応流として一派をなした。尊応准後の書とは別筆と思われるが、同時代の作例と見てよい。他に伏見宮貞敬親王の息にして仁孝天皇の養子、南都一条院門跡となった尊応法親王もいるが、掲出資料の筆者には時代的にふさわしくない。嘉右衛門および古筆了信の極札あり。(高田信敬)

22 異本『平家物語』(断簡) 〔鎌倉末期〕写 *伝世尊寺行俊筆 *長門切

登録番号、1435278。5行。縦29.0cm×横10.5cm。料紙、楮打紙。界高、26.8cm。嘉右衛門による極札あり。「世尊寺行俊」。

『平家物語』は、寺社や知識階級に読まれることを目的として作成された読み本系(延慶本・長門本・源平盛衰記(以下盛衰記)・四部合戦状本など)と、琵琶法師の語りの台本であったとされる語り本系(屋代本・覚一本・中院本など)とに大別されるが、断簡も多く存在する。その一つが名物切として名高い「長門切」(平家切とも)である。

長門切はもと卷子本で、伝称筆者は「世尊寺行俊」(生年未詳~1407)とされてきた。しかし、行俊よりも古く、おそらくは鎌倉末期頃の書写であろうと指摘されている。さらに、炭素測定の結果、料紙は1284年前後10年程度のものであることも確認され、現存する『平家物語』の中では最古と言っても過言ではない。絵巻の詞書ではなく、世尊寺流に属する三手の能筆による寄合書きで、高貴な人物のために作成された例外的な大型卷子本であったという。長門切に付された極札の中では、古筆本家二代了栄(1607~78)や古筆別家二代了任(1629~74)のものが古いので、卷子本の切断は了栄や了任らの頃に始まったと考えられる。

本文は、大半が盛衰記に、一部は延慶本や長門本に共通し、まま独自異文を持つ。『平家物語』の古態研究は近年延慶本一辺倒であったが、盛衰記の祖本的なものが鎌倉末期頃に存在していたことは、極めて重要な意味を持つと言えよう。

長門切は現在、88葉(模写4葉を含む)の存在が確認できる。当館はその1/5の17葉を蔵しており、最大のまとまりである。

掲出したのは、盛衰記巻35「栗津合戦(樋口次郎降人)」に相当する部分。「三十騎には不過程り造道四塚東寺の門へそ／あゆませける樋口次郎京へ入ると聞へければ／九郎義経の(※1)郎等とも我先にと七条(※2)を西へ／朱雀大宮を下りに東寺四塚へ馳向て合戦を／遂んとす樋口か甥に信濃武者千野大郎光弘と」(※1「の」の右傍に「か」。※2「条」の左傍に朱の「リ」)。

『平家物語』諸本では、木曾義仲の討死と今井四郎兼平の自害の後、兼平の兄樋口次郎兼光とその甥千野太郎光弘(諏訪神社上社神官の一族で、千野郷(長野県茅野市宮川)が名字の地。「千野」は「茅野」、「光弘」は「光広」とも)らの動向が語られる。この長門切本文は、兼光の入京とそれを聞いた義経郎

等の動き、光弘の名を記す場面である。この数行後に位置する長門切「名乗て懸出」も当館が蔵している。いずれもおおむね盛衰記に近い。

盛衰記によれば、入京時三十騎以下に減っていた兼光の軍勢が、都の造道、四塚、東寺の門へ馬を歩ませ行くと、兼光入京の噂を聞いた九郎義経の郎等どもが七条大路を西へ、朱雀大宮を下り、造道へ馳せ向かう。兼光の甥茅野太郎光弘は、義仲に加勢するため東山道からただ一騎で上京するが、すでに義仲は討たれていたのだった。光弘は兼光が入京すると聞き、急ぎ四塚辺りへ馳せ向かい、兼光の軍勢に加わって散々に戦った。

長門切の本文で三十騎に満たないのは、盛衰記同様、兼光の軍勢を指すのであろう。造道、四塚、東寺の門へと馬を進めるのは盛衰記に同じ。兼光の入京を知った義経の郎等が七条を西へ、朱雀大宮を下るのも盛衰記と同様だが、向かう先は、長門切本文は「東寺四塚」、盛衰記は「つくり道」である。彼らの様子を長門切本文は「我先に」とするが、盛衰記にこの文言はない。長門切は光弘を「信濃武者」とするが、盛衰記は「信濃国住人」とする。(平藤幸)

23 異本『平家物語』(断簡) 〔鎌倉末期〕写 *伝世尊寺行俊筆 *長門切

登録番号、1360370。手鑑所収。5行。縦30.0cm×横11.0cm。料紙、楮打紙。界高、27.0cm。神田家四代目道伴(1678～1749)による極札あり。「世尊寺行俊卿 倒す」。

掲出したのは、盛衰記巻37「則綱討盛俊」に相当する部分。「倒す頭は水の底に足は空に成てをきん／＼(踊り字)／としけるを則綱上ニのらへて起しも不立／刀をぬきて菅も拳も通れと指すまゝ／にやかて頸をそかきたりける水もたまら／す落ちにけり太刀のさきに貫て高く指上て」。

一の谷合戦の「越中前司最期」の場面である。盛衰記では、越中前司盛俊に組み敷かれて頸を切られそうになった猪俣小平六則綱が言葉巧みに盛俊を騙し、盛俊に助けられ、二人で田の畔に腰掛けて語り合う。そこに塩谷五郎維広が近づいてきたので、則綱は、維広を待って盛俊を討ったならば二人で討ったと言われて不本意だし、維広に盛俊の頸を取られるのは悔しいから、自分が殺して後世を弔おうと思う。そこで、自分がいるから安心しろと言って盛俊を油断させ、両手で後ろの深田に突き倒す。頭は水の底に、足は岸の端にという体勢になった盛俊は起き上がろうとするが、則綱は盛俊の上に乗れ、頸を切る。太刀の先に頸を貫いて高く捧げて馬に乗り、大声で、鬼神盛俊の頸を取ったことを叫ぶ。盛衰記は則綱のこの振る舞いを「誠にゆゆしくぞ聞こえける」と評価する。

掲出した長門切本文は、おおむね盛衰記に近く、一部延慶本・長門本に近い。突き倒された盛俊の様子を「をきん／＼としけるを」とするのは盛衰記・延慶本・長門本に共通する。「則綱上ニのらへて」と「太刀のさきに貫て高く指上て」は盛衰記と同じだが、「起しも不立」と「菅も拳も通れと指すまゝにやかて頸をそかきたりける」は盛衰記になく、延慶本・長門本に近い。「菅(つか)は、刀の柄(つか)のことで、刀の柄やそれを握る拳までも突き通そうという、軍記や説話の合戦場面にまま見られる、激しい殺意を表す時の表現である。「足は空に成て」は独自の表現。「水もたまらず(ず)落ちにけり」も、(ここでは)独自の表現。切れ味よく見事に頸を切り落とすさまを言う。なお、本断簡に後接する断簡(個人蔵)は則綱の振る舞いを「実ニゆゝしくそ(ぞ)聞へ(べ)し」と評価しており、この点は盛衰記に共通する。近づいてくる人物を、盛衰記は「塩谷五郎維広」、他本は「人見四郎」とするが、掲出部分と後接の長門切本文からは、誰なのかはわからない。塩谷とするか人見とするかあるいは他とするかで、より長門切本文の特質を窺うことができよう。ツレの発見が俟たれる。(平藤幸)

Ⅲ その他—注釈・校訂・文法書—

24 『古今和歌集注』 編著者未詳 卷子装1軸 〔室町中期〕写 *伝転法輪公敦筆

登録番号、1410256。金欄緞子割小菱亀甲繫ぎ地に鶴文様の後補表紙。縦23.9cm×横23.5cm。外題なし。内題、「古今和歌集上(下)」。全24紙(1紙は縦23.9cm×横46.7～49.4cm)。料紙、楮紙。見返し、金切箔野毛散らし。和歌は一つ書形式で、1首全体あるいは一部のみを掲出。注文は、被注歌から改行して1～3字下げ。字高、和歌は約22.0cm、注文は約19.5cm。奥書・識語等なし。片桐洋一旧蔵。

桐箱入り。蓋の表に「古今集書巻 轉法輪公敦公筆」と墨書。「轉法輪公敦／三條公敦／永正四年四月八日卒／將軍足利義植／後柏原天皇の／御代」と墨書した文書が付属する。極札なし。転法輪三條公敦(永享11年〈1439〉～永正4年〈1507〉、69歳)筆の短冊や写本と比較すると、真筆とは言い難い。ただ

し、公敦と同時代の写本であろう。

平安中期に成立した『古今和歌集』は、以後、歌人のみならずあらゆる文化人の学ぶべき古典作品として尊重され、中世には数多くの注釈書（以下「古今注」）が作られた。慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』（勉誠出版、2007年）には350種以上の古今注が紹介されるが、当該本は未収で、新出の古今注である。

当該本の注文は主に歌ことばや歌意の解説で、長くても3行程度。編著者未詳であるが、『頭注密勘』の密勘部、すなわち定家の説を「家説」と称す。ただし、細かい文言は異なる上、非常に簡略化されているため、他の注釈書等を介した間接的な影響が想定される。

掲出したのは『百人一首』でもおなじみの紀貫之歌。「初瀬にまうづるごとに宿りける人の家に久しく宿らで…／人はいさ心も知らずふるさは花ぞ昔の香に匂ひける」（春上・42）の注として、「つらゆきは、はつせの申子によりて、まいりたるとなり」とある。これは毘沙門堂本古今集注などの「本説をもって説く古今注」（根拠不明の怪しげな説が目立つ古今注）に特徴的な説である。当該本は『頭注密勘』の定家説という穏当な説とともに、こうした胡乱な説も見える点で注目される。（河田翔子）

25 『後訂萬葉集考異』中村春野編著 袋綴 2冊（『後訂 萬葉集考異』1冊、『後訂 萬葉集 壹』1冊）

崇徳院六五〇年忌に際して、讃岐国高松藩の国学者・中村春野が讃岐国安益郡松山の白峯寺に奉納した箱入の2冊。

・第一冊『後訂 萬葉集考異』〔文化10年（1813年）〕筆。

登録番号、1442198。砥粉色表紙に向い松喰鶴と松文様の丸散らし。縦29.2cm×横19.8cm。外題は、左肩茜色金銀霞引短冊に墨書で「〔後訂〕萬葉集考異」（箱書きと同筆）。首題「〔後訂〕萬葉集考異」。本文料紙、楮紙。見返し本文共紙。首尾に遊紙各1葉を置く。墨付15丁。

1～3丁に源（中村）春野の筆による藤井高尚序（「後訂萬葉集之序／文化十年二月三日長門守藤井宿禰高尚」）。高尚の序は『松屋文後集下巻』（古文辞部）に「校正萬葉集序」として収載されている。半葉おいて4～5丁に春野による自序（「後訂萬葉集序／文化十年正月二十六日 源春野」）。その後、6～9丁に春野筆の凡例をおき、10～15丁に第二冊（「〔後訂〕萬葉集 壹」）の改補の内容と根拠を肉筆で示す。第二冊が活字版であるのに対して、本冊はすべて肉筆で書かれている（本文の所在〈丁・行〉を示す朱の囲みには活字を用いる）。

第一冊（「〔後訂〕萬葉集考異」）の春野自序には、万葉仮名で「万葉集は檜の葉の名に負へる古言であり、年を経るままに「松」を「杣」と書ける類が増えて煩わしいことなので、契沖・真淵やその後の識者の説を考え合わせて、崇徳院の御霊に労ぎて宜しと思う文字に書き改めて瑞籬の内に納める」といった内容が記されている。

・第二冊『後訂 萬葉集 壹』〔文化10年（1813年）〕版。

登録番号、1442198。表紙は第一冊同様、砥粉色表紙に向い松喰鶴と松文様の丸散らし。縦29.2cm×横19.8cm。外題は、左肩茜色金銀霞引短冊に墨書で「〔後訂〕萬葉集 壹」（箱書きと同筆）。首題「〔後訂〕萬葉集卷第一」（「後訂」のみ肉筆）。本文料紙、楮紙。見返し本文共紙。首尾に遊紙各1葉を置く。版心に書名（「〔後訂〕萬葉集 卷第一」）・丁付あり。巻末29ウに「〔後訂〕萬葉集卷第一終」（「後訂」のみ肉筆）。半葉8行。1行18字で、訓を欠くこと以外は整版本と同じ体裁。

第一冊（「〔後訂〕萬葉集考異」）で示した校訂を反映した木活字版の萬葉集巻一1冊（但し、歌の左注等、一部肉筆書の箇所がある）。本文校訂を目的とするため訓は付されていない。

版心の丁付によると全29丁であるが、第27丁が脱で、旧国歌大観歌番号60番歌末尾～77番歌途中までが欠脱している。一丁分は6首程度のはずだが17首分脱落している理由は不明。

源（中村）春野（1773-1837、号は五松）は、高松藩国学の中心に位置した国学者。宣長の高弟で備中吉備津神社祠官であった藤井高尚に学び、高尚の著『伊勢物語新釈』の跋文を草すなど門下で重んじられた（『国学者伝記集成』）。

本書凡例には、「賀茂真淵の『万葉考』に従って巻の順序（巻番号）を改める」とあり、萬葉集全巻が存したような書きぶりだが、二冊用に設えた箱書きは外題と同字であり、箱には四隅に釘を打った跡がある。また、現在のところ僚巻も見えず、春野が校訂して白峯寺に奉納した万葉集はもとより当該の一巻すなわち萬葉集巻一のみであった可能性が高い。

『国学者伝記集成』によると、「雲上御奉納詩歌書之写」に『校訂万葉集考異』（二冊）『松山百首』『神賀詞』（一通）が奉納されたと記されているという。また、『松屋文後集』（天保3年刊）に「校正萬葉集序」として高尚の序が収載されており、「校訂万葉集」たる書のあることは知られていたが、1992年頃

に岡山大学の教授であった工藤進思郎が個人蔵の『後訂萬葉集考異』を実見するまで長らく未確認であった。この時、工藤が見たのは『後訂萬葉集考異』一冊のみであったようで、その時の本が掲出の第一冊なのか、別にもう一冊（あるいはもう一セット）あるのかは不明である。

藤井高尚は本書の他に、春野校訂の『正訓日本書紀』『日本紀竟宴和歌集』（天保四年〈1833〉刊）に序を寄せているが、本書の成立は『日本紀竟宴和歌集』の刊行に二十年先立つ。また、春野は高尚の『伊勢物語新釈』に跋文を寄せている。跋文の執筆年は不明ながら仮に渡辺重豊による序と同じ文化 12 年とするならば、文化 10 年成立の本書は、高尚と春野との交わりを示す最も古い資料ということになる。なお、本書第一冊の高尚序には万葉仮名で「去年の秋よりここに書通はして我が松乃屋に……居る鳥の恭しく従ひて教へを受けむと云ひ遣せたるを……」と記されており、春野が高尚の門弟となったのは、本書成立からわずか半年ほど前の、文化九年秋のことであったと判明する。（新沢典子）

【参考文献】

大川茂雄・南茂樹『国学者伝記集成』（1904 年、大日本図書）、『香川県史 年表 別編Ⅱ』（1991 年、四国新聞社）、工藤進思郎『藤井高尚と松屋派』（1986 年、風間書房）、同「藤井高尚と中村春野—讃岐の門人たちとの交流」（『岡山大学文学部紀要』18 巻 1992 年 12 月）。

26 Elements of Japanese Grammar, for the Use of Beginners, by Rutherford Alcock. 1 冊

1861 年刊 上海

登録番号、1054633。縦 28.0cm×横 20.0cm。全 67 ページ。原装。書題は『初学者用日本文法綱要』や『初学者用日本文法要説』などと邦訳される。本文は英語による。なお Kaiser, Stefan, ed. (1995) *The Western Rediscovery of the Japanese Language* に復刻がある。上村和也（1994）に「序章」の邦訳があるが、全編とおしての邦訳は未だ無い。

著者 Rutherford Alcock（ラザフォード・オールコック）は英国総領事館の初代総領事であり、後に日本駐在特命全権公使となった人物で、日本での滞在日記『大君の都』（*The capital of the Tycoon*）で知られている。

本書は英国人による日本語文法書の嚆矢である。日本語の多様な表記や漢語（音）と和語（訓）の相違について丁寧な記述がなされる一方、各品詞については挙例の豊富さに比して解説が少ない点に憾みがある。

また印刷物として特徴的なのは、英文の左横書きの中に、カタカナによる日本語の用例を 90 度横転させて印字している点である。同時期の欧文資料には日本語を左横書きで印刷するものも見られ、日本語の書記形式の過渡期の様相をうかがい知ることができる。（遠藤佳那子）

【参考文献】

新村出（1928）「英公使オルコックの日本文典」『同志社文学』3（『新村出全集』第 4 巻（筑摩書房 1971）に再録）、古田東朔（2010）『古田東朔近現代日本語生成史コレクション第 3 巻』くろしお出版、上村和也（1994）「ラザフォード・オールコック著『初学者用日本文法綱要』」『鹿児島大学文科報告』30（第 2 分冊）。

凡 例

1. 書目一覧は、原則として書名、著者名（著者名が未詳のものは省略）、装訂、巻冊数、刊写年（刊写者）の順で記し、特記事項は「*」以降にまとめた。
2. 書名は原則として『国書総目録』に拠り、未記載のものは鶴見大学整理書名を記した。
3. 推定記載は〔 〕、小字双行注は〈 〉に括り、2 字以上の踊字は「／＼」、改行は「／」または「/」とし、丁の変わり目には「」を付した。
4. 各解題の執筆者名は解題末尾に記した。

第 161 回鶴見大学図書館貴重書展

「古典籍の文献学—鶴見大学図書館の蒐書を巡る—」

第二部 物語と歌書

発行日：2024 年 10 月 10 日 編集・発行：鶴見大学図書館

